地質ニュース654号，20－21頁，2009年2月
Chishitsu News no.654, p.20－21, February, 2009

名古屋大学博物館で開催された「地質の日」特別講演会

足　立　　守[1)]

1. はじめに

名古屋大学博物館は，2000年4月に国内で5番目の大学博物館として誕生しました．前身の古川総合研究資料館や年代測定資料研究センターにおける資料研究を引き継ぎ，1981年まで附属図書館として利用されてきた古川記念館（写真1）の一角で，「名古屋大学の知のショーケース」，「大学と社会とのインターフェイス」としての活動を行っています．

約400m^{2}の2階展示室の大半を占める常設展示は，4つのコーナー（濃尾平野と木曽三川の自然史，名古屋大学の研究，フィールドワーク，電子顕微鏡）から構成され，木曽馬の骨格標本，樹齢950年の木曽檜，日本最古の岩石，縄文貝塚のはぎ取り標本，プロトタイプの電子顕微鏡，野依教授のノーベル化学賞など，名古屋大学の研究を特徴づける文系・理系の標本や資料が展示されています．展示とは別に，講演会，コンサート，ボタニカルアート講座，自然観察会などの普及行事が頻繁に開催されています．こうした博物館活動の最新情報は，当館のホームページ＜http://www.num.nagoya-u.ac.jp/＞に常時掲載されています．

写真1　名古屋大学博物館が設置されている古川記念館．

名古屋大学博物館は，昨春，初の「地質の日」イベントとして，5月17日に市民向けの特別講演会を開催しました．この講演会は，博物館が学会とタイアップして実施している各種の市民向け啓蒙活動の一つとして行われたものです．この日は，日本応用地質学会中部支部の平成20年度総会が博物館講義室であり，総会後の会員向け講演会を市民にも開放する形で，日本応用地質学会中部支部と名古屋大学博物館との共催で開催されました．

2. 特別講演会の様子

当日は，埼玉大学地圏科学研究センターの渡辺邦夫教授が「応用地質学と考古・歴史学との出会い－遺跡修復を考える－」という演題で，約1時間の講演を行いました．講演会に関する新聞記事が5月14日に掲載されたこともあって，会場の博物館講義室は約70名の聴衆で満席になりました．講演会では，まず，私が三葉虫やビカリヤなどの形をした化石チョコレート（産総研の斎藤　眞氏発案の特製チョコレート）を見せながら，地質の日の制定経緯や地質学が地球の理解に不可欠であることを簡単に解説しました．引き続いて，渡辺教授がイランやタジキスタンで手がけてきた古代遺跡の修復の実例を，多くのスライドを使って説明しました（写真2）．特に渡辺教授がユネスコの国際専門家リーダーとして修復プロジェクトを担当したタジキスタンの古代シルクロード沿いのアジナテパ仏教遺跡について，遺跡の測量と周辺の地質調査，修復方法の検討，日干しレンガの作成，日干しレンガと盛り土によるストゥーパの被覆までの修復プロセスを苦労話も交えて分かりやすく解説しました．聴衆は

1）名古屋大学博物館
464-8601 名古屋市千種区不老町

キーワード：地質の日，特別講演会，名古屋大学博物館

写真2　渡辺邦夫教授による講演風景.

仏教遺跡建造の歴史と先人の知恵，遺跡に関する日本と現地の考え方の違い，異文化交流の難しさなどについて理解を深めていました.

講演後の質疑応答では，「シルクロード沿いには，未発見の仏教遺跡がまだ多くあるのか」，「修復作業中に山賊などに襲われることはないのか」といった質問とともに，「日本は地質学による国際貢献をもっと大々的に展開するべきである」，「地質学が非常に幅広く重要な学問だということが今日初めて分かった」，「なぜ，地質学を中学・高校・大学でもっとたくさん教えないのか」，「文科省や外務省は地質学の重要性をどの程度理解しているのか」といった本質的な意見も多く飛び出し，「地質の日」特別講演会は大いに盛り上がりました.

3. 名古屋大学博物館の「地質の日」への今後の取り組み

名古屋大学博物館では，「大学と社会とのインターフェイス」活動の一環として，今後も毎年，「地質の日」に合わせた地質講演会や野外地質観察会を開催する予定です.

現在，名古屋大学博物館が重点的に行なっている一般の博物館と一味違った活動には，(1) ミューズ・セラピー活動，(2) キャンパスミュージアム活動，(3) 地球教室，(4) 博物館という新しいパイプによる海外の姉妹校大学との国際交流があります.

(1) ミューズ・セラピー活動としては，博物館コンサートやボタニカルアート講座を行なっています. ミューズ・セラピー（Muse therapy；Adachi, 2003）という概念は，本物のいい標本，音楽・絵画などの芸術，自然には，人の心を癒す力があるという発想から生まれたものです. そして，本物の標本に囲まれた中で生演奏を楽しむ博物館コンサート（NUMCo＝Nagoya University Museum Concert）をこれまでに25回開催しました.

(2) 名古屋大学博物館ではキャンパスミュージアム構想も積極的に進めています. 東山キャンパスには，博物館野外観察園，約200万年前の砂礫層，古墳時代の窯跡，江戸時代から存在していた「八事（やごと）−唐山（からやま）古道」の一部，大学に寄付された建物，ノーベル賞受賞記念碑・記念樹などの歴史的要素が多数点在しています. また，本部の建物，環境総合館，共通教育棟の玄関の一角に，各種の標本をサテライト展示として整備しつつあります.

(3) 次世代教育では，“モノ”離れや自然離れが進んでいる若者を対象にして，人間の五感をフルに発揮して，本物から何かを感じとり感性を磨く自然誌教育に力を入れています. 中学生向けの岩礁生物観察会，高校生向けの野外実習や電子顕微鏡を使うSSH事業，地域の博物館と連携して行なう親子向けの地球教室が代表的なものです. これらの中で最も人気を集めている地球教室は，博物館の束田（つかだ）和弘助教が企画立案しているユニークな自然観察会で，「子供の理科嫌いは親の理科嫌いに起因する」という反省に立って，親子共々自然が好きになるような工夫をして，年に4〜6回，自然の中で日帰りや1泊2日の観察会を行なっています.

(4) 海外の姉妹校大学との国際交流では，モンゴルが中心になっています. 名古屋大学博物館とモンゴル科学技術大学との間で締結された学術交流協定に基づいて，モンゴル中部の古生界の共同研究や人的交流が6年前から進行中です. 2012年には，共同研究成果を基に，「大モンゴル展」を開催する予定で準備を進めています.

参　考　文　献

Adachi, M. (2003)：'Muse therapy' as a new concept for museums. Museologia, 3, 117-120.

ADACHI Mamoru (2009)：A special lecture on 'Geology Day' at the Nagoya University Museum.

＜受付：2009年1月7日＞